

CONTENTS

◆研究科長より

- ・フラテ祭について 1

◆教授就任挨拶

- ・豊嶋 崇徳 教授 2

◆学術・教育

- ・平成24年度医学研究科・医学部教育ワーク
ショップ（FD）開催 3
- ・大学院教室紹介「眼科学分野」 4
- ・オープンキャンパスを開催して 6
- ・第8回北海道大学大学院医学研究科・
医学部医学科音羽博次奨学基金授与式について 7
- ・マッチングを経験して 8
- ・高校生メディカル講座に参加して 9
- ・第55回東日本医科学学生総合体育大会 10
- ・最先端国際セミナーのご報告 11
- ・医学部を出て基礎研究者を目指す－MD-PhDコース－ 12

・北海道大学プレスリリースより

- ・海馬神経伝達を光でスイッチ・オフ
～記憶形成の時間経過を解明～ 13
- ・肝臓・前立腺がんをとらえる最新治療に新たな一歩
～金マーカ刺入キットが保険適用に～ 13
- ・受賞関係 14

◆お知らせ

- ・戻ってきた絵「旧本館」 15
- ・医学研究科・歯学研究科合同慰霊式を挙行 16
- ・動物慰霊式を挙行 16
- ・新任教授特別セミナーについて 17
- ・平成24年度 医学研究科・医学部医学科
「優秀研究賞」、「優秀教育賞」、「優秀論文賞」
及び「特別賞」について 17
- ・第107回医師国家試験について 18
- ・平成25年度 大学院入学試験について 18
- ・平成24年度 科学研究費助成事業採択状況 18
- ・平成24年度 財団等の研究助成採択状況 19

広報室便り 23・編集後記 20

1 研究科長より

フラテ祭について

玉 木 長 良 （たまき ながら）医学研究科長・医学部長



今年はまだ残暑の厳しさを感じる9月16日（日）に恒例の北海道大学医学部フラテ祭2012を実施いたしました。そして多くの教職員や学生スタッフの協力もあり、魅力ある会にすることができました。

医学部同窓会生の皆様に加えて、同窓生の先生方を遥かに上回る

現役学生のご家族の方々からお申し込みがありました。学生が勉学に励み、友人たちとどのような環境下で充実した日々を過ごしているのか、実際にその場を巡り、お伝えすることができました。

今年も2010年に完成した医学部学友会館「フラテ」（以降、フラテ会館）のホールや大研修室にて執り行いました。

まず第一部として施設・キャンパスツアーを実施しました。昨年同様、医歯学総合研究棟や医学部図書館の講義室を主体とした医学部施設巡りのコース、高度先進医療支援センターや検査・輸血部、放射線部などを主体とした病院巡りのコース、およびキャンパス全般をバスで巡るキャンパス巡りのコースを用意しました。この第一部には133名の方々のご参加がありました。

第二部では講演会として、私が医学部の取り組みを、福田病院長からは病院の現況を、そして同窓生を代表して東北大学包括的脳科学研究・教育センター顧問の丹治順先生に「今、脳科学が面白い」と題したご講演をいただきました。第二部には154名に及ぶ多くの方々のご聴講がありました。講演会の最後には音羽博次基金授与式を執り行いました。音羽先生にも会場にお越しいただき、多くの参加者の前で授賞式をおごそかに実施しました。

さらに第三部の交歓会はフラテ会館ホールにて北大男声合唱団による「都ぞ弥生」・「学友会歌」の合唱が披露されました。その後、となりの大研修室に場所を移して元

北海道大学医学部同窓会長の齋藤和雄先生の祝杯により開会し、祝宴では学生による弦楽四重奏に耳を傾けながら和やかな雰囲気となりました。この場では寺沢教授と渥美教授による医学部の歴史や現在の様子を紹介するスライド上映が行われました。また、恒例の「都ぞ弥生」を男声合唱団と共に合唱しました。多くの同窓生の方々が昔の学生時代を懐かしんで歌われたのではないのでしょうか。そして、最後は福田北大病院長による乾杯にて締め括られました。第三部にも85名の方々にご参加いただきました。

今年のフラテ祭も成功裏に終了することができましたと思います。ご参加された方々にはもちろん、フラテ祭を運

営された実行委員やご協力いただいた皆様にもこの誌をお借りして心からお礼申し上げます。



2 教授就任挨拶

血液内科学分野

豊 嶋 崇 徳 (てしま たかのり) 教授



2012年8月1日付けで血液内科学分野教授を拝命いたしました。「豊嶋」と書いて「てしま」と読みます。ここに謹んで新任のご挨拶を申し上げます。北海道大学における血液診療は古くから各ナンバー内科によって担当されておりましたが、2009年より「造血細胞移植センター」として血液診療の一本化が図られ、2011年8月には講座組織も一本化されました。この、新生「血液内科」のバトンを、初代今村雅寛前教授より私が引き継がせて頂くこととなり、大変光栄であると同時に、責任の重さに身の引き締まる思いです。

恐縮ではありますが、簡単に自己紹介をさせていただきます。私は、鳥取県の日本海沿岸の農村で生まれ、米子東高校を経て、九州大学医学部に入学しました。1986年に卒業後九州大学第一内科に入局し、血液内科を専攻しました。そこで仁保喜之教授、原田実根教授の指導の下、自己末梢血幹細胞移植法の開発研究に取り組み、白血病などの幅広いがん治療の手段としての本法の普及、保険適応に貢献できました。その後岡山大学第二内科に移り、同種末梢血幹細胞移植法の開発に取り組んだのち、白血病など血液疾患の治療成績の向上には造血幹細胞移植法の改良が必要と考え、5年間の米国留学 (Dana-Farber Cancer Institute, Michigan 大学) で、移植免疫学を中心に白血病学、腫瘍免疫学を学びました。その後、岡山大学第二内科に戻り、臨床の傍ら、移植免疫の研究グループを立ち上げました。2004年に、新設の九州大学遺伝子・細胞療法部にうつり、さまざまな臨床研究を行うと同時に、基礎研究をさらに展開しました。また、学会活動を通じて造血幹細胞移植の多数のガイドラインを刊行し、わが国の血液診療のレベルアップに努めてきました。

このように私は、異動することによって新たな仲間と巡り合い、新たな視点を得ることで成長してきたと

思っています。この間、多くの若者を世界中に送り出し、益々大きな人の輪が出来ました。

これまで脈々と培われてきた北海道大学の血液学、血液診療の伝統と業績に、私のこのような経験が融合することによって、新生「血液内科」をますます充実させ、新たなステージへと昇華させていくのが私の使命であると肝に銘じております。

新生「血液内科」は歴史が新しいこともあり、若者が主体の情熱にあふれた教室です。明るく、開放的で、多様性を許容する懐の深い教室運営をめざし、多くの若者を集めたいと思います。そして医師である前提として、自らが魅力にあふれる人間であり、相対したときに熱い思いがひしひし伝わってきて、患者さんや周囲のスタッフから心から尊敬されるような医師を育てたいと思います。同時に、疾患を科学的に徹底して分析する姿勢を持ち、問題を発見し、研究によってこれを解決しようという志と能力をもった医師でもあってほしいと願っています。

“世界の北大”であるためには、基礎研究の充実に力を注がねばなりません。世界に誇れる高いレベルにあるわが国の生命科学の発展に、医学部卒業生の貢献が大きかったのは皆が認める紛れもない事実です。臨床指向の強い若者にとっては、基礎研究に従事することは少々回り道に思えるかもしれませんが、疾患を科学的に徹底して分析する姿勢とその成果は、最終的に臨床医学の発展に貢献できることを伝えていくのも私たちの使命であると考えています。血液学、幹細胞学、免疫学、腫瘍学、輸血学をキーワードに、高いレベルの研究を発展・維持するために、基礎部門や、国内外の施設、企業との共同研究、人的交流を積極的にすすめていきたいと思っています。

一方で、私たちには広大な北海道全体の血液診療を支えていく義務があります。各地で頑張っておられる諸先輩方と一体となって、北海道全土のすべての血液疾患の患者さんに対応できるよう地域医療を盛り上げていきたいと思っています。医学研究科、医学部の皆様のご指導、ご鞭撻とご支援を承りますよう、切にお願いし、ご挨拶とさせていただきます。

平成24年度医学研究科・医学部教育ワークショップ（FD）開催

大 滝 純 司 医学教育推進センター 教授

今年度の北海道大学医学研究科・医学部教育ワークショップは、8月17日～18日の両日、札幌北広島クラッセホテルを会場に開催されました。これは、教員の教育能力向上を目的とした研修（FD：Faculty Development）の一環として行うもので、文部科学省も強く推奨しており、また大学の外部評価の審査基準にも明記されている活動です。

今回のテーマは、「診療参加型臨床実習」でした。このテーマが設定された背景には、医学教育で「2023年問題」とも呼ばれている、医学教育への国際認証の導入が関係しています。医学教育に国際基準を導入する動きは以前からいくつかありましたが、2年前に米国のECFMGという機関が世界各国に送った通知が事態を急展開させました。ECFMGは、米国以外の国の医学部卒業生が米国で臨床医として活動する資格を審査する機関です。従来から受験者個人に対する試験を行っていましたが、2023年からは卒業した医学部・医科大学も審査の対象とするのです。その審査基準の詳細は紙幅の関係で省略しますが、日本の医学部・医科大学で最も問題になるのが臨床実習です。医師の診療などを見るだけのことが多い「見学型」の実習を、学生にも研修医のような診療活動をさせる「診療参加型」に転換し、しかも実習期間を大幅に延長することが求められるのです。北大医学部の臨床実習の期間は現在52週間で、間もなく54週間に伸ばす予定ですが、上記の2023年問題に対応する目安として文科省は、72週間以上を提示しています。

この重大なテーマに、玉木研究科長、秋田教務委員長をはじめ、基礎医学・社会医学・臨床医学から37名の教員が参加して取り組みました。事務部からは2名が裏方として参加してくださいました。タスクフォースと呼ばれる、企画の運営を支援するスタッフは、医学教育推進センターの小華和准教授と教育助教8名と私、同センターの教育企画実施委員会の委員である医療統計・医療システム学分野の川畑助教と法医学分野の村上助教が務めました。

初日の前半は、現在の臨床実習における問題点や、臨床実習を72週間に増やす際の問題点について、少人数のグループに分かれて検討し、その結果を全体会で発表しました。後半では、診療参加型実習の具体的な目的やノウハウについて学んだうえで、グループ毎に任意の診療科を設定して、実習の具体的な内容を設計しました。これらの作業を通して、今後のカリキュラムの改変に必要な検討課題が具体的に浮かび上がりました。

初日の夕食後の懇親会では、ディベート方式の学習を全員で体験しながら交流を深めました。ディベートのテーマは「講義に学生の飲物の持込を許可するべきか」で、とても盛り上がりました。

2日目は、前日の議論をもとに、今後の検討課題の整理を全体会で行いました。挙げられた論点を以下に示します。

I. 診療参加型臨床実習の拡充

1. 指導側の体制（特に人員）の確保
2. 「診療科別」「必修／選択」期間の配分
3. 学外実習先の体制整備
4. 学生の自習を支援する体制と環境の整備
5. 他職種との連携を学ぶ機会の整備

II. 臨床実習の延長に伴うカリキュラム変更

1. 基礎や臨床の授業の圧縮
2. 臨床実習期間に行う授業
3. 臨床実習期間に行う社会医学実習
4. 基礎と臨床のさらなる統合（基礎実習の統合）
5. M1の段階で専門科目の授業

III. その他の課題や提案

1. 授業内容の順番の整備
2. 病院見学の選択必修化

その後、参加者への修了証授与が行われ、閉会しました。

今回はリゾートホテルでの研修会であり、快適な環境のもと参加者の意欲も高まり、積極的な意見交換ができたように思います。検討され整理された論点が、今後の本学の医学教育のさらなる改善に役立つことを、そして参加された先生方の教育への取り組みが一層活性化されますようお願いしております。最後になりましたが、参加された、そして準備にご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。



集合写真

大学院教室紹介「眼科学分野」

石 田 晋 教授
南 場 研 一 医局長



北海道大学大学院医学研究科眼科学分野は、大正11年5月北海道帝国大学医学部に「眼科学講座」が開設されことに始まった長い歴史をもつ教室です。初代越智貞見教授、第2代藤山英寿教授、第3代杉浦清治教授、第4代松田英彦教授、第5代大野重昭教授、そして現在、2009年より第6代教授として石田晋が教室運営をさせて頂いています。眼科は眼科学分野に加えて眼循環代謝学講座、炎症眼科学講座の関連寄付講座と連携するとともに、主任教授の石田の他、陳進輝診療教授、大野重昭特任教授（炎症眼科学講座）の3教授体制で運営しており、このことにより眼科としての人的規模は拡大し、研究領域の幅広さが担保されています。

教室の運営は診療・教育・研究の3本の柱で成り立っていますが、この3本の柱をバランス良くおこなうことを目指しています。まずは診療についてご紹介しましょう。

北大眼科における最も大きな特徴はその守備範囲の広さです。他大学での眼科診療は教授の専門に特化されることが多いのですが、北大眼科では12の専門外来を持ち、ほぼすべての眼科領域をカバーしています。しかもどの専門外来も世界に通用する最先端の医療を提供しているという自負があります。日本広しといえどもこのような大学病院の眼科は他にないでしょう。

1) 網膜硝子体外来 責任医師：斎藤 航

近年の硝子体手術機器の進歩により手術適応患者数が増加しており、眼科の中で最も大きなグループとなりました。網膜剥離などの臨時手術もたくさん手がけながら、一方で増殖糖尿病網膜症など難治例に対する硝子体手術も数多くおこなっています。

2) ぶどう膜炎外来 責任医師：南場 研一

先代の太田重昭教授の専門分野であり、今でも多くの患者をかかえる大きなグループです。ベーチェット病に対するインフリキシマブ（レミケード®）治療が有効であったことから、現在他の生物学的製剤による治療が進行しています。ぶどう膜炎の経過中に白内障手術、硝子体手術が必要になることも多く、外科的治療をおこなうこともぶどう膜炎グループの仕事のひとつです。

3) 角膜移植外来 責任医師：大口 剛司

従来の角膜移植は全例で角膜全層移植をおこなってい

ましたが、現在は、角膜内皮だけを移植する角膜内皮移植や、角膜内皮はそのままにしておき、その上の実質から上を移植する角膜深層表層移植などがおこなわれるようになり、角膜移植外来ではそのようなパーツ移植もおこなっています。これまで通り、ドライアイ、円錐角膜、角膜感染症、角膜ヘルペス、角膜ジストロフィーなど前眼部疾患に幅広く対応しています。

4) 眼アレルギー外来 責任医師：南場 研一

アレルギー性結膜疾患の中でも重症な増殖性変化を来す春季カタルの治療を主におこなっています。最近ではシクロスポリン点眼、タクロリムス点眼が保険適応となり、有効な治療法であることが示されてきました。

5) 斜視・小児眼科外来 責任医師：吉田 和彦

小児期の重要な眼疾患として斜視がありますが、この疾患は適切な視能訓練をおこなうこと、そして適切な時期に適切な手術を行うことが重要です。近年、この分野の専門外来を有する大学病院が減ってきていますが、北大病院では最も古くから継続されている伝統ある専門外来のひとつです。

6) 緑内障グループ 責任医師：陳 進輝

陳診療教授が2005年に360°スーチャートラベクトミー変法を考案、世界に発信しましたが、それ以降、日本でも多くの施設で取り入れられるようになってきました。手術を要する緑内障患者の紹介も増え、緑内障手術件数も毎年増加しています。このように緑内障の分野で名の知れた陳先生ですが、実はグルメ教授としても名が知られています。

7) 眼循環代謝外来 責任医師：斎藤 航

生活習慣病に由来する眼疾患を対象とした診断機器の新規開発および診断機器を用いた眼底画像情報の客観的評価法の確立とレーザースペックルフローグラフィを用いた各種疾患における網脈絡膜循環の定量的解析を行っています。特に、急性帯状潜在性網膜外層症や自己免疫性網膜症など新しい疾患の病態解明に取り組んでいます。

8) 黄斑外来 責任医師：斎藤 航

年々増え続ける加齢黄斑変性（AMD）に対応するため2011年4月に新設された外来です。AMDの治療としてPDTトリプル療法という光線力学療法、抗VEGF抗体硝子体注射、ステロイドテノン嚢下注射を併施する方法についてその有効性を発表してきました。今後さらに長期成績を含め臨床研究を進展させる予定です。

9) 眼形成眼窩外来 責任医師：野田 実香

責任医師の野田実香先生は日本で最も有名な眼科女医といっても良いでしょう。学会でのシンポジウム、イン

ストラクショナルコースなどで引っ張りだこです。眼瞼下垂などの眼瞼手術はもちろん、眼窩腫瘍の切除などもおこなっています。

10) 涙道外来 責任医師：野田 実香

鼻涙管閉塞に対する涙道再建をおこなっています。その方法は多岐にわたり、状態に合わせてブジー、涙道チューブ挿入術、涙嚢摘出術、涙嚢鼻腔吻合術などをおこなっています。

11) 神経眼科外来 責任医師：新明 康弘

様々な視神経疾患、眼球運動障害を診療しています。視神経炎の中でも抗アクアポリン4抗体陽性視神経炎の存在が注目されており、特に視力予後が悪いことが報告されてきました。北大でも数例経験しており血漿交換療法などを試みています。また、眼瞼けいれんに対するボトックス療法もおこなっています。

12) 白内障外来 責任医師：笹本 洋一

客員臨床教授の笹本洋一先生に毎週金曜日午後に来ていただき、主に白内障手術の術前検査、時には手術に関する詳しい説明もおこなっています。一般の外来ではなかなか忙しく術前の検査と説明はじっくりと時間をかけてできないため、この専門外来は一般外来の円滑な進行にも重要な役割を担っています。

また、陳進輝診療教授・新明康弘外来医長・吉沢史子病棟医長による多くのシステム整備・改革が進められ、その結果、外来患者数、入院患者数、手術件数いずれも着実に増加しています。特に手術件数はこの3年間で倍増しました。患者数増加による待ち時間等の諸問題が生じましたが、新患も含めた完全予約制を導入することで、さらに、すべての眼科検査を担う視能訓練士（ORT）を増員して頂くことにより、急増する検査数に対応しています。

次に教育面ですが、野田実香教育主任のもとで特に研修医教育に力を入れており、毎週月曜・金曜の診療前にモーニングクルーズを年間約80回おこなっています。また、将来の指導者を育成することを目的とした「臨床指導医育成プログラム」を立ち上げました。これは、ある特化した専門分野の技術を習得してもらうために、数年間にわたり関連病院と連携しながら一貫しておこなわれるプログラムとなっています。この育成プログラムを卒業した医局員は、北大または関連病院で活躍して頂き、習得した技術を後輩に伝える役割を担います。現在は1) 網膜、2) ぶどう膜、3) 緑内障、4) 眼形成眼窩・神経、5) 斜視・小児、6) 角膜と6つのプログラムを用意しており、このシステムにより北大眼科にとって明確な将来構想を踏まえた医局人事が推進されると考えています。

研究面では、野田航介研究主任・神田敦宏副主任により、眼細胞生物学視覚科学研究室の運営が円滑に行われ、研究費と大学院生の増加による研究室環境の充実・アクティビティの向上がはっきりわかるようになりました。それは、英文論文の着実な増加や、数多くの学術賞の受賞にも顕著に表れています。現在研究グループは、眼免疫学（グループチーフ：北市伸義）、網膜細胞生物学（血管）（グループチーフ：野田航介）、網膜細胞生物学（神経）（グループチーフ：新明康弘）、眼腫瘍・病理学（グループチーフ：加瀬諭）の4つのグループがあります。

眼免疫学グループはぶどう膜炎動物モデルと分子遺伝学研究を基盤とし、最近では天然由来色素の抗酸化作用、抗炎症作用に注目しています。

網膜細胞生物学（血管）グループは眼科内で現在最も大きな研究グループとなっており、糖尿病網膜症、加齢黄斑変性について「炎症」と「血管新生病態」を抑制するための分子メカニズム、特に（プロ）レニン、VAP-1、ARMS2という分子に注目した研究を行っています。

網膜細胞生物学（神経）グループは、東京都医学総合研究所の原田高幸先生との共同研究で、正常眼圧緑内障のマウスモデルとされるグルタミン酸トランスポーターノックアウトマウスを用いた研究を行っており、緑内障の病態解明を目指しています。

眼腫瘍・病理学グループは、主として手術や生検時に採取されたヒトの検体を病理組織学的に詳細に解析し、臨床所見の理解を深める研究をおこなっています。



集合写真

オープンキャンパスを開催して

渡 邊 雅 彦 入試委員会アドミッション実施部会 部会長

今年のオープンキャンパスは、8月6日（月）に自由参加プログラムを学友会館フラテ「ホール」にて、翌7日には高校生限定プログラムを医歯学総合研究棟の組織病理学実習室にて開催した。

自由参加プログラムは、ホールの収容人数を考慮して午前・午後の部とも定員を280名として行い、午前の部293名、午後の部224名、合計517名の参加者があった（札幌市内190名、札幌市外の道内145名、その他181名）。これは昨年に比べ約100名、一昨年より約200名の増加となっている。玉木長良医学研究科長の挨拶の後、医学部紹介DVDを上映し、その後約1時間に渡り病院見学コース（ガイドツアーため60名定員）と学部見学コースに分かれ施設見学を行った。病院見学コースでは、放射線部、検査・輸血部、病理部を回って説明を受けながら見学した。学部見学コースでは、医歯学総合研究棟と図書館において骨学実習（局所解剖室）、最先端の研究機器紹介（電子顕微鏡室）、プレパラート検鏡による組織学実習（組織病理学実習室）、組織学の模擬講義（第1講堂）も開催し、参加者はこれらを自由に見学して回った。その後、ホールに戻って、参加者からの質問に対して、医学部の教員と学生が回答する質疑応答を行った。将来専門とする診療科は学生のうちに決めるのか、医学部卒業生は北大病院に残るのか、地域医療を目指す学生はいるのか、研究を選ぶ学生はいるのか、北大医学部の強い点は何か、入試で理科3科目を課す理由は、将来医師として活躍するのに英語が必要なのか、など予想どおり例年と同様の質問が出た。これに加え、今年は理系総合から医学科に進学するのと最初から医学科に入学するのはどちらが難しいか、27年度入試より理科3科目を廃止して物理を必修とする変更の理由はなど、時期を得た鋭い質問も飛び出した。昨年までの「医学科第1志望」の午前の部という印象から、今年は午前だけでなく午後の部においても医学科への熱い視線を感じた。

高校生限定プログラムでは、昨年と同様に定員を100名とし、事前登録の受付開始から10分ほどで登録がいっぱいになったと聞いている。実際に参加したのは88名（札幌市内37名、札幌市外の道内28名、その他23名）であった。玉木長良医学研究科長による挨拶の後、田中真樹教授が医学部3年次に対して行っている神経生理学講義の中から「大脳連合野の機能」の講義を行った。その後、参加した高校生を2つのグループに分け、一方が実習室前方で病理学の肺癌のプレパラート実習を行っている間に、他方のグループは実習室後方の展示企画に参加した。田中伸哉教授が病理学のプレパラート実習を担当し、正常な肺組織と癌化した肺組織を検鏡し、スケッチを指導した。展示企画には解剖学講座、生理学講座、病理学講座、神経生物学分野の教員と学生があたり、高校

生への説明や質問への対応を行った。終了時に行った無記名式のアンケートで印象深かったことはという質問に対しては、「ヒトの脳や臓器に触れたこと」という回答がもっとも多かったが、他にも、「人間の骨がとてもうまくできているところ。関節が曲がる仕組みがよくわかった」（秋田高、1年男子）、「自分も脳について自分について知りたいと考えていたので、大脳についての講義が非常に興味深かったです」（湘南高、2年男子）、「臓器のホルマリン漬けを観察し、解説を聞きながら正常と異常を自分の目で比較できたこと」（栄光学園、2年男子）、「腕に電気を流して手が動くかどうかを体験して、自分もいつも脳から電気を送って手や足を動かしているということが実感できたのがとても興味深かったです」（苫小牧東高、1年女子）、「医学生と1対1で話すことができて、今後の勉強に対する意欲がわいた」（札幌西、2年女子）などという回答があった。また、満足度の5段階評価（大変面白かった／面白かった／普通／つまらなかった／大変つまらなかった）では、満足度の平均が4.8、理解度の5段階評価（ほとんど理解できた／結構理解できた／ふつう／あまり理解できなかった／ほとんど理解できなかった）の平均が4.1と、どちらも高い評価を得ることができた。

最後に、施設見学で説明していただいた放射線医学分野の藤間憲幸特任助教、検査・輸血部の重松明男助教、病理部の畑中佳奈子助教、解剖発生学分野の山崎美和子講師、電子顕微鏡室の中村秀樹助手、組織細胞学分野の岩永敏彦教授、国際連携室の高野廣子講師に深く感謝したい。

また、施設見学で引率や質疑応答を担当したアドミッション実施部会の各部会員と吉岡充弘研究科長補佐、高校生限定プログラムの準備と実施を担当した田中真樹教授、田中伸哉教授、岩永敏彦教授、神谷温之教授、関連分野の教員・大学院生、医学部6年の佐藤洋祐君、山田修平君、箱田浩之君、5年の今本鉄平君、比嘉綱己君、坂入あいさん、4年の新田統昭君、豊田真帆さん、3年の仙万梨子さんそしてこれらの企画全般の計画と運営に奔走していただいた鈴木百江係長、安達孝徳さん始め医学科教務担当の皆様にも、厚く御礼を申し上げたい。



オープンキャンパス（自由参加プログラム）

医学研究科・医学部入試委員会アドミッション実施部会

部会長 渡 邊 雅 彦（解剖発生学分野）
 部会員 岩 永 敏 彦（組織細胞学分野）
 高 野 廣 子（国際連携室）
 田 中 伸 哉（腫瘍病理学分野）
 田 中 真 樹（神経生理学分野）
 大 場 雄 介（腫瘍病理学分野）
 橋 野 聡（消化器内科学分野）
 渥 美 達 也（免疫・代謝内科学分野）
 岩 崎 倫 政（整形外科学分野）



病院見学ツアーの様子



在学生から説明を受ける参加者



田中伸哉教授による模擬講義



挨拶をする玉木学部長

第8回（平成24年度）北海道大学大学院医学研究科・医学部医学科音羽博次奨学基金授与式について

今年度で第8回目となる「北海道大学大学院医学研究科・医学部医学科音羽博次奨学基金要項」に基づく奨学基金授与式が、去る9月16日（日）に開催された「フラテ祭2012」において举行されました。

応募者は21名で、選考の結果、次の13名に奨学金が授与されました。



集合写真

医 学 科3年	柴 田 美 音
医 学 科4年	寺 井 小百合
医 学 科5年	大 塚 勇太郎
医 学 科6年	小 原 次 郎
医 学 科6年	定 本 圭 弘
博士課程2年	角 田 健太郎
博士課程3年	佐 藤 隆 博
博士課程3年	齋 藤 奈 央
博士課程4年	檀 崎 敬 子
博士課程4年	中 沢 大 悟
博士課程4年	アントン レニコフ
博士課程4年	蔡 華 英
博士課程4年	ムハンマド バグダーディー

マッチングを経験して

水 門 由 佳 医学科6年



マッチングと言うと、医学生の就職活動に関して知識がない人の中には「婚活」を想像する人もいるようだが、医学生と病院の相思相愛の組み合わせを決めるという意味では似ているのかもしれない。

臨床研修制度マッチング（通称「マッチング」）

とは、研修病院にとっては初期研修医を、医学生にとっては初期研修先を混乱なく決定するための制度である。マッチング参加病院は採用したい学生のリストを作成し、マッチング参加者の学生は志望病院のリストを作成して、一定のアルゴリズムに従ってコンピュータ上で両リストを上位から照らし合わせ、「病院－学生」の組み合わせを決定していく。

いかにして病院を決めるかであるが、希望の地域を決めたら、合同病院説明会や先輩・同期からの口コミにより情報を集め、興味を持った病院の事務と連絡を取り、見学をした上で判断する場合が多い。多くの学生は臨床実習の始まる5年生頃から長期休みを利用して、病院見学を行う。

学生は其々の基準によって、その病院が自分にとって魅力的か否かを判断する。その基準をいくつか挙げると、救急当直の頻度（当直が皆無の病院から、月に10回を超える当直が課せられる病院まで様々である）、初期研修医の教育体制（勉強会の有無、上級医によるフィードバックが頻繁になされているか）、初期研修医の数、症例数、志望科の研修が充実していそうか、病院が育てようとしている医師像に共感できるか、研修カリキュラム、初期研修後の進路、立地、給与、雰囲気、直感など、具体的に述べられるものから、あまりに抽象的なものまであり、その優先順位は各学生によって様々である。

一方、病院側も欲しい学生を選ぶため、病院のカラーを反映した採用試験を課す。全ての病院で面接があり、その他に課すものとしては、英語論文を用いた試験、国家試験に似たマルチプルチョイス形式の試験、小論文、グループ討論など様々である。さらに、病院によっては実習中の学生の態度も考慮に入れているだろう。

私は優柔不断な性格なので、全国各地の病院を見学し、その中の4病院を受験した。正直に申し上げると、病院見学には退屈な場面もあり、水を飲むタイミングをつかめず脱水状態になることもあった。さらに見学後には感想文やお礼メールを送り、受験の際には事前に小論文や自己アピールなどの提出を義務付けられた。それら全部を思い返してみると決して楽ではなかった。

ではマッチングに関わる情報収集・病院見学・受験などで私は何を得たか。まず、何気なく過ごしていたら、決して出会うことのなかった医学生・研修医・上級医と出会い、新たな情報や考え方、医師としての働き方の多様性を知ることができた。市中病院の医療を見学することにより、大学病院の医療との違いや、自分の想像とのずれを認識することができた。さらに、履歴書や小論文の作成において悩むことで中期的な目標について真剣に考える必要に迫られた。面接においては、学生生活についてのことを聞かれ、様々な方にお世話になって成し遂げたことが多いことに改めて気が付いた。

初期臨床研修制度により、学生の選択肢は広がり、同時に個人責任が重くなったと思う。優柔不断な私のような人間にとっては選択肢が多すぎて困惑する制度ではあるが、主体的に就職活動を行うことにより、社会人としてのマナーを学び、多様な考え方・働き方を知り、中期的な将来について考えることができた。

来年、マッチした病院において、自分が理想とする医師に近づけるよう研修に励みたい。

マッチングを控える皆さん、どの病院も歓迎してくださるから、興味を持ったら見学をお願いしてみてもは如何だろうか。

高校生メディカル講座に参加して

大 野 重 昭 炎症眼科学講座 特任教授

1. はじめに

この度、私は平成24年度「地域医療を支える人づくりプロジェクト事業」に係る高校生メディカル講座に出席し、高校生に対する講演の機会をいただきました。この事業は北海道教育委員会と北海道大学医学部、札幌医科大学、旭川医科大学の間で交わされた北海道の地域医療を支える人材育成に向けた連携と協力に関する協定書に基づいて実施されたものです。

2. 小樽潮陵高校での高校生メディカル講座

今回のメディカル講座は平成24年7月18日に小樽潮陵高校で行われました。講師は医学研究科から大野が「医学を学ぶ意義」と題して50分間講演、また保健科学研究院からは林裕子准教授と大内潤子助教が「看護の可視化」についてお二人で合計50分間の講演をされました。そしてそれぞれの講演後に質疑応答が行われました。

3. 講演会の様子

今回の講演会の参加者は82名であり、そのうち71名からアンケートの回答が寄せられたそうです。小樽潮陵高校から講演会後にご提供いただいたアンケート結果によると各学年の高校生が67名でしたが、中学生も4名参加しており、その意識の高さに驚かされました。また、地域的には小樽市内の学生が主でしたが、一部の生徒はバスで2時間ほどの岩内町からもわざわざ参加したそうで、後志管内には事前に主管校の小樽潮陵高校から広く連絡されておりました。

講演会では私はスライドを映写しながら話を進め、医学部だけではなくパラメディカルの関連領域についても大まかな情報提供をさせていただきました。そして、実際の医学部入学後の卒前教育の紹介に加え、卒後の大学院システムや進路の詳細をお話しました。特に医学イコール臨床医学とは限らず、基礎医学や社会医学の重要性、あるいはグローバルな国際医療への参加についても力説しました。また、自分自身の医学部入学後の臨床経験、研究領域についてもお話させていただきました。

高校生の前で医学のお話をするのは初めてでしたが、医学部学生とは違って私語もなく、全員が熱心に傾聴してくれる姿勢には感銘しました（写真）。私は父親が転勤族で子供のころから転校が多く、高校は3校で学びました。その昔、高校3年生の夏に小樽潮陵高校に転校し、

この高校を卒業しましたが、今回卒業後39年目に偶然母校を再訪問させていただきました。当時の校舎の面影は全く見られませんでした。後輩達の熱意には大いに感激しました。

4. アンケート結果

今回のアンケート結果によると、出席者の進路希望は医師だけではなく看護師、薬剤師、理学療法士、作業療法士、放射線技師など多岐に亘っておりました。講義の内容は77%が「大変参考になった」、23%が「まあまあ参考になった」という結果であり、「参考にならなかった」はゼロでした。「次回聞いてみたい内容」として「法医学とは何を学ぶ領域なのか」とか、「基礎医学についてもっと話を聞きたい」、「地域医療について聞きたい」といった記載があり、非常にうれしく感じました。

5. おわりに

医学、医療関連領域に多少なりとも興味を持つ中学生、高校生への啓蒙活動は、今後ますますその重要性が高まることは確実です。我々はこのような貴重な講演会に積極的に参加し、これを活用して、医学領域により優秀な人材が多数応募してくれる一助としたいものです。

今回参加した中学3年生が「医療について、知らないことが多かったけど今日の講座を聞いていろいろなことがわかった。医療関係の仕事に就くために、これからもいろいろなことを学んでいきたい。」という感想を書いた通り、今後我々の側からも一層の努力が強く望まれます。



高校生メディカル講座の様子

第55回東日本医科学生総合体育大会

三 橋 友理子 医学科2年・東医体評議委員

第55回東日本医科学生総合体育大会夏季部門が、東邦大学医学部・山梨大学医学部・東京医科大学・慶應義塾大学医学部を主管校として、8月上旬に開催されました。

東医体は夏季開催が20競技、冬季開催が3競技あり、その運営を主管校の学生が行う、1年に1度の大規模な大会です。さらに今年は猛暑ということもあって熱中症など体調管理が心配されましたが、主管校運営役員の尽力、各大学の多大なるご助力など、様々な人たちのご協力により大きな問題もなく無事開催し、終了することができました。

本年度はロンドンオリンピックと重なったこともあり、日本中がスポーツに熱狂する中、各選手が1年間頑張ってきた練習の成果を存分に発揮しました。大学間の交流、友情、勝利した喜び、負けたときの悔しさ、仲間と一致団結して戦った思い出など、大会を通してたくさんのことを学び、私たちの学生生活でのかけがえのない思い出となったことでしょう。

以下、北海道大学の部活の主な結果を報告します。

<北海道大学2012東医体結果報告>

・陸上部 110mH	優勝
・準硬式野球部	優勝
・硬式テニス部男子団体	準優勝
・ " 女子団体	ベスト8
・軟式テニス部女子団体	ベスト4
・バドミントン部女子団体	ベスト8
・ " 女子個人	ベスト4
・ボート部男子	優勝
・ " 女子	3位
・水泳部男子	6位



ゴルフ部



水泳部



バドミントン部



硬式テニス部



ソフトテニス部

最先端研究開発国際セミナーのご報告

梅 垣 菊 男 最先端研究開発事業支援室 特任教授

2012年7月24日に、北海道大学医学部学友会館フ
ラテホールにおいて、最先端研究開発国際セミナー
(Real-time Tumor-tracking Radiation Therapy with 4D
Molecular Imaging Technique)を開催いたしました。本
国際セミナーは国家プロジェクト「最先端研究開発支援
プログラム (FIRST)」の公開活動の一環として、関係
機関のご協力を得て実施させていただきました。この場
を借りて、ご協力いただいた関係各位に厚く御礼申し上
げます。

FIRSTでは、中心研究者である本学白土博樹教授と共
同提案者の京都大学平岡真寛教授のもとで、北海道大学
が研究支援機関となり、医学研究科に最先端研究開発事
業支援室を設置して「持続的発展を見据えた分子追跡放
射線治療装置の開発」を推進しています。これまで2011
年2月と2012年2月に京都国際会館において、それぞれ
2日間の国際シンポジウムを開催しましたが、今回は場
所を札幌に移し、第31回札幌国際がんシンポジウムと
連続開催する形で、1日間の最先端国際セミナーを開催
しました。北海道の研究者を中心に78人の方にご参加
いただきました。

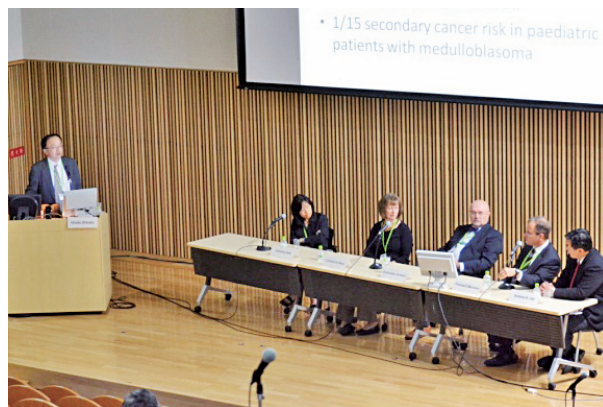
中心研究者である白土教授に開会の挨拶をいただいた
後、最先端プロジェクト「分子追跡放射線治療装置の開

発」の進捗状況を、プロジェクトマネージャーである筆
者から報告しました。特別講演として海外の著名な研
究者を招き、St. Jude Children's Research HospitalのT.
E. Merchant先生、MD Anderson Cancer CenterのA. K.
Lee先生にそれぞれ「陽子線を用いた小児がん治療への
期待」、「陽子線治療の実績と期待」を中心に語って
いただくと共に、国内からは、京都大学の溝脇尚志先生、筑
波大学の櫻井英幸先生にX線治療、陽子線治療の最新
の研究についてご紹介いただきました。将来の放射線治療
をテーマに、参加いただいた専門家の間でパネルディス
カッションを実施し、陽子線治療の意義と将来果たすべ
き役割に対する認識を深めました。特に小児がん治療に
対して、陽子線治療の優れた特徴が確認されました。今
回の国際セミナーを通じて、放射線治療を第一線で預か
る多くの医師、研究者、技術者の方々に、最先端プログ
ラムで進めている研究の重要性、臨床的意義を発信する
と共に、そのアプローチの方法について議論、共有する
ことができたと考えています。

今後も「最先端研究開発支援プログラム」を着実に遂
行すると共に、最先端の放射線がん治療の発展に貢献し
ていきたいと考えておりますので、皆さまのご指導をよ
ろしく願いいたします。



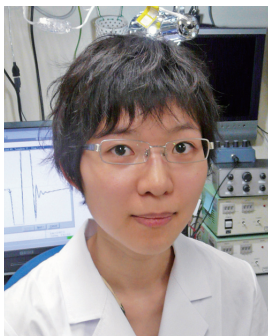
白土教授による開会の挨拶



パネルディスカッションの様子

医学部を出て基礎研究者を目指す－MD-PhDコース－

松 嶋 藻 乃（あやの） 神経生理学分野 博士課程3年



MD-PhD コースの一期生、現在博士課程3年の松嶋藻乃です。神経生理学分野に所属しており、教室員 みなさんに大変お世話になり、励まされながら、日々研究生活を送っています。

「医学部を卒業して、お医者さんにならない、ってどういうこと？」とよく訊かれます。医学部は、“医療”に携わる臨床医を育てる場所と一般に考えられがちですが、“医学”の発展・進歩に貢献する生命科学研究者を育てる使命も帯びています。MD-PhD コースとは、後者を目指す学生を支援する仕組みで、医学部6年生の選択実習のときに、基礎研究室を選択し、卒業・国家試験所得後、初期研修を経ずにそのまま博士課程に進みます。支援内容としては、大学院の学費の全額補助などがあります。私の場合は、医学部入学当初より研究に興味がありましたので、学部2年生の冬ごろから、いろいろな研究室にお邪魔をし、3年生ごろから、今いる神経生理学分野に通うようになりました。医学部では、卒業研究を行うために研究室に配属されることがなく、何もしなければ、全く研究とは何かを知らずに卒業できてしまう、大学の中では、かなり特殊な学部です。ですから、もし、基礎研究に興味があれば、自分から行動を起こさなければなりません。

基礎研究とは、“Science”をすることです。Scienceは、目の前で困っている人を助けられる訳でも、その成果が直近に役立つものでもありません。しかし、物事の根本にある原理、つづめて言えば、真実を探求することですから、科学上の発見は、時にものの見方をガラッと変えるパラダイムシフトを起こすことがあります。既に存在する治療法を改良したりすることは、すぐに応用に移すことができますが、もしかしたら、根本的に間違っているかもしれません。科学は、少し遠回りに見えても、根本的な部分を明らかにしたい、という動機で動いていますから、すぐには役に立たなくても、長い目でみればよ

り多くの人を助けられる可能性を秘めています。

神経生理学分野では、サルを用いて脳の高次機能の研究しています。脳研究は、歴史的に見ても、脳梗塞・変性疾患などで局所的に脳が障害された患者さんの知見から多くを学んでおり、医学と切っても切れない関係にあります。どんなものでもそうですが、正常に働いているときは、コントロール機構がどんなにすごいことをしているか分からないものです。壊れてみてはじめて、正常のすごさが分かります。私が、脳に興味を持った理由は、ヒトの作った文化・科学、そしてすべての学問は、“脳”に規定されていると思ったからです。わかりやすく言うと、脳が違えば、論理が違い、数学だって違うでしょう。ヒトとヒトが理解しあえるのも、前提にある論理が共通だからです。私の大きな目標は、その論理を規定する脳の仕組みを解明し、論理が破綻する（話が通じなくなる）統合失調症などの精神疾患の根本を知りたいと思っています。

基礎研究者は、Scienceを楽しみ、“発見の鋭い喜び”に出合う瞬間を目指して、常に挑戦しないではいけない人になる職業だと思います。私はまだ、そのような瞬間には合っていませんが、小さな発見をした時の、「世界でこれを知っているのは私しかいない！」という感覚がとても好きです。もやもやした問題に対して、自分でも納得できる科学的説明を見つけ、それまでの常識（教科書的事実）を変える仕事を、一生のうち一つでもしたいと思っています。

研究に限りませんが、何か挑戦的なものは、若いうちに踏み切るべきだと思います。若いうちから、守りに入っては終わりと思い、攻めの姿勢を忘れないようにしています。それと同時に、無理はしても、無茶はしないようにするのが目下の課題です。人間だんだん保守的になるのが普通ですから、今踏み切れないものは10年後も踏み切れません。これを読んでおられる方も、自分の没頭できるものを一つみつけ、やると決めたら本気でやってください。成功したときの喜びは、それまでの苦労に比例しますから。

各研究のホームページ掲載内容はこれから <http://www.hokudai.ac.jp/?lid=3>

海馬神経伝達を光でスイッチ・オフ ～記憶形成の時間経過を解明～

神谷 温之 神経生物学分野 教授

神経科学の最近のトピックスとして、光照射により神経活動を操作する、いわゆる「光操作法」の開発があげられる。光学的な手法を用いることで、時間的・空間的に限局して神経活動を操作することが可能になり、神経ネットワークの機能解析が急速に進展しつつある。われわれの研究室では光操作法の有用性に早くから注目し、脳のシナプス伝達を光で制御する研究手法の開発を試みてきた。脳の多くの興奮性シナプスではグルタミン酸が神経伝達物質として用いられる。そこで、光反応性グルタミン酸受容体ブロッカーANQXをマウス海馬スライスに適用し、短時間の光照射と組み合わせることで、グルタミン酸伝達を光学的に抑制することを可能にした。記憶の細胞メカニズムであるシナプス可塑性の解析に応用した最近の研究を紹介する。

グルタミン酸受容体のシナプス局在は極めて動的に制御されている。記憶に関わる「海馬」のシナプスでは、強い神経活動により持続的にシナプス伝達が強化され記憶痕跡を形成する。この際に、細胞内の予備プールの存在するグルタミン酸受容体がシナプスに移行し神経伝達を強化すると考えられている。しかしながら、「いつ」グルタミン酸受容体のシナプスへの補給が生じるかについては、これまでの研究で一定の結論が得られていなかった。その理由の一つとして、分子標識として用いられてきたGFPなどの蛍光タンパクが巨大分子であり、正常なグルタミン酸受容体の動きが測定できていなかった可能性が考えられる。そこで、分子サイズの小さな化合物であるANQXを用いることで、より生理的な条件でのグルタミン酸受容体のシナプス移行の時間経過を解析した。細胞内予備プールのグルタミン酸受容体は、高頻度刺激を与えた直後にシナプスの細胞膜に補給されることがわかった。海馬シナプスに「記憶痕跡」が刷り込まれる時間的経過が明らかになったわけである。

今回開発した手法のもう一つの応用として、光照射部位を限局して入力特異的「光」遮断を行うことが考えられる。これまで特定の入力の機能を調べるためには、神経核の損傷や神経毒による変性を用いるため、代償作用や間接効果の寄与を注意深く検討する必要があった。本手法は、非侵襲的かつ選択的に興奮性入力を遮断できる

ため、複雑な脳の神経ネットワークにおける特定の入力の役割を明らかにするうえで、汎用性の高い新規の脳機能解析法になると期待される。

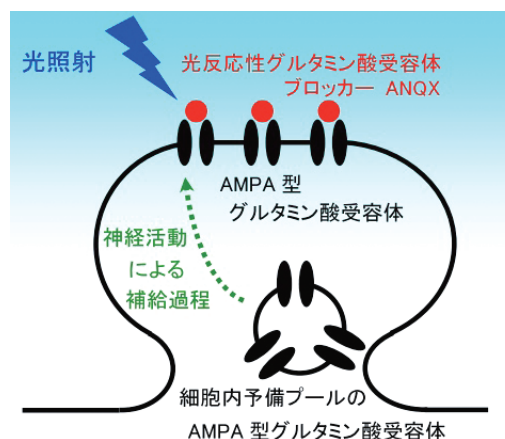


図 光不活化法によるグルタミン酸受容体の動態解析

【掲載論文】

Kamiya H. "Photochemical inactivation analysis of temporal dynamics of postsynaptic native AMPA receptors in hippocampal slices" *J. Neurosci.* 32, 6517-6524, 2012.

(研究発表プレスリリース掲載日 2012.5.9)

肝臓・前立腺がんをとらえる最新治療に新たな一歩 ～金マーカ刺入キット（画像誘導放射線治療用医療機器）が保険適用に～

稲毛 富士郎

北海道大学探索医療教育研究センター
北海道臨床開発機構

白土 博樹

放射線医学分野 教授

北海道大学とメディキット株式会社は、画像誘導放射線治療技術や「動体追跡・追尾放射線治療」に使用する医療機器の共同開発を進めてきましたが、「植込み型病変識別マーカ」（販売名：金マーカ刺入キット）としての製造販売承認が取れ（平成24年4月26日）、さらに6月1日付で保険適用になりました。

がんの放射線治療において、高い安全性を確保しながら治療効果をより向上させるためには、標的とするがん

に正確に放射線を照射すると同時に、周囲の正常組織への照射を可能な限り低く抑える技術が必須です。その有力な技術として北海道大学が特許を保有する「動体追跡照射技術」があります。この技術は、がんの近くに留置した金属製のマーカを指標としながらかんの位置をリアルタイムで高精度のコンピュータで捉え、がんが目標位置に入った時に放射線を照射し、がんのみを狙い撃ちにするものです。これによって、がんへの的確な照射と、正常組織への照射回避が可能となります。今回、保険適用となった「金マーカ刺入キット」は、指標とする金マーカとそれを目的とするがんの近くに留置するための器具をセットした製品です（図参照）。

金マーカは、生体内での安全性とX線透視での十分な視認性を両立することが難しかったのですが、医学研究科白土博樹教授が中心となって、メディキット株式会社、北海道大学病院の放射線診断科および泌尿器科との10年にわたる研究で実現に至りました。研究の最終段階では、文部科学省の「橋渡し研究支援推進プログラム」により設立されたトランスレーショナル研究支援組織である「北海道臨床開発機構（HTR）」が支援しました。支援業務としては、製造販売承認取得に向けたプロジェクトの進捗管理、早期の承認取得を目指した薬事戦略の策定、申請資料の分担作成・全体レビュー、医療機器としての審査を行う医薬品医療機器総合機構との折衝窓口、などがありました。また本品の開発は、平成19年度に設置された「先端医療開発特区（スーパー特区）」の採択課題の一環でもあり、薬事規制への対応を中心とした支援を受けました。これら、研究者、臨床医師、企業、支援組織がそれぞれの専門性を結集したことにより、「金マーカ刺入キット」のより早期の保険適用につながったものと考えます。

本品が保険適用となったことにより、がん患者の方々への高精度な放射線治療を広めることが可能となります。開発に関与した一員として臨床への広い普及を願ってやみません。



図 金マーカ刺入キットの概要

【掲載論文】

Naoki Miyamoto, Masayori Ishikawa, Gerard Bengua, Kenneth Sutherland, Ryusuke Suzuki, Suguru Kimura, Shinichi Shimizu, Rikiya Onimaru and Hiroki Shirato, “Optimization of fluoroscopy parameters using pattern matching prediction in the real-time tumor-tracking radiotherapy system” *Phys. Med. Biol.* 56, pp.4803-4814, 2011.

（研究発表プレスリリース掲載日 2012.7.25）

受賞関係

医学研究科・医学部医学科から受賞されました。
平成24年6月から平成24年9月までを掲載します。

1. 2012/09/06

タ・キンキン（連携研究センター分子細胞イメージング部門特任助教）
第40回日本磁気共鳴医学会大会長賞受賞
研究題目：Laterality of the corticospinal tract and the influence of handedness: the findings of a DTI study

2. 2012/07/26

松嶋 藻乃（神経生理学分野博士課程学生）
包括型脳科学研究推進支援ネットワーク 夏のワークショップ 若手優秀発表賞受賞
研究題目：複数の刺激位置を記憶するための神経機構

3. 2012/06/16

篠原 信雄（腎泌尿器外科学分野准教授）
泌尿器科再建再生研究会 研究会賞受賞
研究題目：前腕遊離皮弁を用いた陰茎形成術により陰茎再建に成功した陰茎原発Primitive neuroectodermal tumorの1例

戻ってきた絵「旧本館」

数年前に旧本館（事務所）のレリーフのいわれについて調べていた時に、北大昭和21年卒業（22期）で学部長をされていた（昭和52年5月7日から7月15日まで（事務取扱）、7月16日から昭和56年7月15日まで医学部長）恩村雄太名誉教授（旧病理学第二講座、昭和40年から60年まで教授）にお尋ねした際に、この絵の存在をお聞きました。「百年記念会館に貸してあり、まだ戻ってきていない」とのことだったので、館内にかけてあった実物を見に行ったことを思い出す。

この絵は『北大医学部五十年史』（昭和49年発行）の41ページの中扉にカラーで掲載されている。KUWABARA 1966と書かれている。

本年9月10日に恩村先生にお電話を差し上げた。元気なお声でいらした。昭和52年、私が学部6年生のころ、その日の国家試験の勉強会が済むと仲間と一杯やるのが常であったが、酔うと夜分遅くに先生のお宅に電話をかけては、卒業試験にまつわる愚痴やら何やらを聞いていただいた、懐かしくも恥ずかしい記憶が戻ってくる。先生が部長でいらしたころで、お忙しいところ本当にご迷惑をおかけしたと赤面である。それでも聞いていただいたことでやる気も生じて、国家試験には順当に皆合格した。

お電話でお話くださり、次のようなことが明らかになった。旧本館（大正12年8月30日竣工、1階事務部、2階教授会会議室）を恩村先生は事務所と呼んでいらっしゃったので、以下事務所と書く。事務所は歯学部がその創設時（昭和42年）から昭和45年まで使用し、その後取り壊された。事務所にその絵が掛けてあった。絵の中央に事務所が描かれていて、その右側が生化学、左側が結核研究所とのこと

である。この絵がどういう経緯で描かれたものかはお存知ないとのことであった。

百年記念会館ができた際に、飾るものがないようだったので貸した。北大80周年のとき、杉野目学長のときにクラーク会館が建てられた。法学部出身の今村学長のときに農学部長、理学部長、工学部長と恩村医学部長の4人が中心となって百年記念会館が建った経緯から、絵を貸すことになったとのことであった。ちなみに、入口の館名の文字は恩村先生が書かれたとのことである。

「なぜなかなか戻ってこなかったのでしょうか」と私の質問に、「定年になってからは口出しをしないことにしていた。皆さんの思い出が描かれたこの絵が百年記念会館に飾られているのも悪くはないとも思うようになっていた」と先生は述べられ、「どうかこの絵を大事にしてください」と結ばれた。

法医学分野 寺沢 浩一



左：「医学部正面玄関」（旧本館）
右：「中庭より望む南講堂」

医学研究科・歯学研究科合同慰霊式を挙行

医学研究科及び歯学研究科では、9月26日（水）午後1時30分からクラーク会館講堂において、この1年間医学・歯学の教育・研究・診療のため尊い御遺体を捧げられた292名の御霊の御冥福をお祈りするため、慰霊式を執り行いました。

慰霊式には、御遺族、総長、理事・部局長、教職員、学生、学外関係者等約400名が参列しました。

式は解剖体御芳名奉読の後、参列者全員による黙祷を行い、次いで、玉木医学研究科長及び鈴木歯学研究科長から御霊の御意志に報いるためにも一層の教育・研究・診療の発展に努めたい旨の追悼の辞を申し上げました。その後、参列者による献花を行い、最後に鈴木歯学研究科長から謝辞があり、慰霊式は厳粛のうちに終了しました。



追悼の辞を述べる玉木医学研究科長



献花をする総長



謝辞を述べる鈴木歯学研究科長

動物慰霊式を挙行

医学研究科附属動物実験施設では、9月6日（木）午後4時から、平成24年度動物慰霊式を医学部学友会館「フラテ」ホールにおいて執り行いました。慰霊式は、医学並びに生命医科学の教育研究のために多数の動物の尊い生命が犠牲になっていることを厳粛に受け止め、動物の霊を追悼するとともに、生命の尊厳と倫理について啓発することを目的に実施しているもので、教職員、学生等約120人が参列しました。

はじめに畠山施設長から追悼の辞を申し上げた後、玉木研究科長から挨拶があり、その後、参列者全員による黙祷及び献花を行いました。最後に畠山施設長から適正な動物実験の実施について、一層の理解と協力を願う旨の挨拶があり、厳粛のうちに慰霊式を終了しました。



挨拶を述べる畠山施設長



献花をする玉木研究科長

新任教授特別セミナーについて

医学研究科では、平成24年度より、新任の教授が現状と抱負および研究内容等を講演するセミナーを開催しています。

第4回 平野 聡 教授（消化器外科学分野Ⅱ）
「これからの大学外科教室の使命とは」
平成24年7月26日（木）開催



平野教授の講演

第5回 渥美 達也 教授（免疫・代謝内科学分野）
「自己免疫疾患を克服する：臨床医の立場から」
平成24年9月20日（木）開催



渥美教授の講演

第6回 玉腰 暁子 教授（公衆衛生学分野）
「疫学研究の成果と将来展望」
平成24年10月18日（木）開催



玉腰教授の講演

次回以降の予定は、以下のとおりとなっております。

- ・ 11月22日（木） 坂本 直哉 教授（消化器内科学分野）
- ・ 1月24日（木） 山下 啓子 教授（乳腺・内分泌外科学分野）

平成24年度 医学研究科・医学部医学科「優秀研究賞」、「優秀教育賞」、「優秀論文賞」及び「特別賞」について

医学研究科・医学部医学科では、優れた教育・研究業績等をあげた教職員・学生等、顕著な社会的貢献をした教職員・同窓生の方々を顕彰する制度を平成17年度に創設し、功績等の内容に応じて「優秀研究賞」、「優秀教育賞」、「優秀論文賞」及び「特別賞」を授与しています。

今年度の受賞候補者の推薦は、平成25年1月4日（金）～平成25年1月31日（木）の期間受け付けますので、多数の応募をお待ちしております。

○賞の種類及び対象

- （1）優秀研究賞：顕著な研究業績をあげた専任教職員
- （2）優秀教育賞：顕著な教育業績をあげた専任教職員
- （3）優秀論文賞：特に優れた論文を発表した専任教職員・学生等
- （4）特別賞：医学研究科、国内又は国際社会に顕著な貢献をした専任教職員・同窓生

※優秀研究賞、優秀教育賞及び優秀論文賞は自薦も可

○提出書類：受賞候補者推薦書及び候補者調書

○提出先・資料請求先：医学系事務部総務課庶務担当

（電話：011-706-5004 E-mail：shomu@med.hokudai.ac.jp）

第107回医師国家試験について

来年2月に実施される第107回医師国家試験の日程が7月2日付けの官報により次のとおり公表されました。

出願期間	平成24年11月12日（月）～11月30日（金）
試験日	平成25年2月9日（土）・10日（日）・11日（月）
合格発表	平成25年3月19日（火）午後2時

なお、願書等の書類の提出については、北海道厚生局からの要請により、卒業見込み者については、医学科教務担当で願書等取りまとめ、一括して提出することになっております。具体的な日程・方法等については、決定次第お知らせいたしますが、受験予定者にあつては提出期限の厳守等、ご協力をお願いします。

平成25年度 大学院入学試験について

平成25年度大学院入学試験について

去る、8月29日（水）に修士課程ならびに博士課程の前期入学試験が実施され、9月14日（金）にそれぞれ合格者が発表されました。

各課程の志願者・受験者・合格者は次のとおりです。

課程	区分	修士課程（前期）	博士課程（前期）	博士課程（MD-PhD 特別選抜）
志願者		24名（男11名、女13名）	23名（男18名、女5名）	2名（男1名、女1名）
受験者		23名（男10名、女13名）	21名（男16名、女5名）	2名（男1名、女1名）
合格者		20名（男10名、女10名）	21名（男16名、女5名）	2名（男1名、女1名）

修士課程ならびに博士課程の後期入学試験募集日程は、次のとおりです。

課程	事項	修士課程（後期）	博士課程（後期）
出願資格審査申請期間		平成24年11月6日（火）～11月12日（月）	
出願期間		平成24年12月4日（火）～12月10日（月）	平成24年11月27日（火）～12月3日（月）
試験日		平成25年1月16日（水）	
合格発表日		平成25年2月8日（金）	

平成24年度 科学研究費助成事業採択状況

単位：千円

研究種目	新規申請	継続申請	交付内定（採択）	平成24年度交付決定	
	件数	件数	件数	件数	交付金額
特別推進研究	0	0	0	0	0
特定領域研究	0	0	0	0	0
新学術領域研究（領域提案型）	16	5	8	8	118,690
新学術領域研究（課題提案型）		0	0	0	0
基盤研究（S）	4	0	1	1	69,290
基盤研究（A）	5	5	8	6	79,560
基盤研究（B）	18	16	26	29	178,750
基盤研究（C）	45	37	60	58	99,320
挑戦的萌芽研究	29	9	25	26	55,510
若手研究（S）		0	0	0	0
若手研究（A）	1	0	1	1	10,270
若手研究（B）	30	21	37	37	66,430
研究活動スタート支援	12	4	4	4	5,330
合計	160	97	170	170	683,150

※新学術領域研究（研究課題提案型）及び若手研究（S）は、新規申請の受付停止。

※研究活動スタート支援の採択結果（新規申請分）は現時点で公表されていないため、採択件数は継続申請分のみを記載。

※基盤研究（S）採択に伴い、重複制限のため、基盤研究（A）の交付決定件数から1件を除く。

※交付内定は申請に対する採択のため、平成24年4月1日までの医学研究科の研究者の転入出を含まない。

※交付決定は平成24年9月1日までの医学研究科の研究者の転入出を反映させた数字

※採択率（新規・継続を含む） $170 \div 245 = 69\%$ （研究活動スタート支援の新規申請・採択を除く）

※平成24年9月1日現在

平成24年度 財団等の研究助成採択状況

財団法人等名	種 別	研究者名	交付金
財団法人 喫煙科学研究財団	研究助成	玉木 長良	2,000,000
		秋田 弘俊	2,000,000
		三輪 聡一	2,000,000
		田中 真樹	2,000,000
財団法人 杉野目記念会	海外学識者講演会開催助成	清水 宏	50,000
財団法人 プレインサイエンス振興財団	研究助成	田中 真樹	1,000,000
公益財団法人 サッポロ生物科学振興財団	助成金	山仲 勇二郎	700,000
公益財団法人 加藤記念パイオサイエンス振興財団	国際交流助成（上期）	新熊 悟	250,000
ロート製薬株式会社	ROHTO DERMATOLOGY PRIZE	阿部 理一郎	2,000,000
公益財団法人 小林がん学術振興会	研究助成	橋本 茂	1,000,000
公益財団法人 伊藤医薬学術交流財団	交流助成	神田 敦宏	250,000
		伊 敏	280,000
		小野 大輔	280,000
		西出 真也	280,000
		新熊 悟	250,000
	学会等助成	有賀 正	500,000
		本間 さと	450,000
		瀬谷 司	500,000
公益財団法人 秋山記念生命科学振興財団	研究奨励	神田 敦宏	500,000
	一般研究助成	松本 美佐子	1,000,000
		堀之内 孝広	1,000,000
		田中 真樹	1,000,000
		橋本 あり	1,000,000
財団法人 住友生命社会福祉事業団	海外医学研究助成	氏家 英之	1,500,000
財団法人 北海道大学クラーク記念財団	博士後期課程在学学生研究助成	佐藤 隆博	500,000
		菅野 宏美	500,000
アクテリオンアカデミア事務局	アクテリオンアカデミアプライズ	日嘉 綱己	2,000,000
公益財団法人 内藤記念科学振興財団	特定研究助成	畠山 鎮次	1,500,000
一般社団法人 日本整形外科スポーツ医学会	AOSSM Traveling Fellow	近藤 英司	300,000
公益信託 成茂神経科学研究助成基金	研究助成	宮崎 太輔	300,000
公益信託 三島済一記念眼科研究国際交流基金	国内研究助成	加瀬 諭	1,000,000
公益財団法人 武田科学振興財団	研究奨励	高橋 秀尚	3,000,000
		志馬 寛明	3,000,000
		野田 航介	3,000,000

平成24年8月31日までの採択判明分



(撮影：野入 由起子)

広報室便り 23

平成19年4月に医学研究科・医学部広報室が設置されてから5年余りが経過しました。その間、大きな取り組みとしては、同年11月のホームページリニューアル、平成20年から段階的に進めてきた各種パンフレット類の発行などがあります。本年度からは、ウェブサイトによる情報発信を一層重視し、大学院進学希望者向けに特化したホームページを新設しました。このホームページでは、本研究科の博士課程、修士課程への進学を考えている方へ、有用な情報をわかりやすく伝えるとともに、

研究の楽しさ、面白さを感じていただき、多くの志望者がそれぞれの夢をもって本研究科に進学することに貢献したいと考えています。医学研究科・医学部ホームページにある「大学院〔博士課程・修士課程〕進学希望の皆さんへ」と表示されたバナーを、ぜひクリックしてみてください。URLは、<http://www2.med.hokudai.ac.jp/>です。今後とも、両ホームページの充実には力を入れていきます。ご意見、ご要望など、お寄せください。

(広報室長 白土 博樹)

編集後記

夏に立て替え後のニューヨークの近代美術館に行ってきた。ゴッホのstarry night、モネの睡蓮、サルバドール・ダリなどの代表的な絵画が数多く展示されている。多くの外国の美術館はフラッシュなしの撮影は自由だが、皆絵の前に立つ順番がくるとそれぞれに思いをはせてiPhoneのシャッターをきっていた。

さて今回53号では法医学の寺沢教授に「戻ってきた絵」を御寄稿いただいた。現在、実物は医学部正面玄関一階にある。旧医学部本館や南講堂のとてもいい絵だ。絵を描かせて後世に残すという高桑栄松先生(17期)の発想に旧帝大流の格式の高さを感じる。また、その絵を北大100年記念館が設立された際、寂しくないうようにと貸していた当時の恩村雄太医学部長(22期)の配慮にも感銘をうける。恩村名誉教授は私の直系の第2病理の名誉教授なので、絵の事をお聞きし

た。先生曰く、折に触れて100年記念館を訪れた際には現役時代を懐かしく思い起こされていたとのこと。

宮崎保先生が病院長時代に北大病院が現在のものに新設されたが、その時予算の数%を絵画など芸術的なことに使用しなければならいということもあり尽力されたとお聞きした。また医学部が3年前に改築されフラテホールができた際、48期の橋本先生のプロのお嬢様が医学を題材に書いた絵を数点展示いただいた。また去年は37期の先生方から卒後50周年記念にと寄贈された絵画「大地薫風」がフラテホールの教授会を行う部屋の前に飾られている。

生来貧乏性の筆者は絵は見るものと決めつけていたが、絵画を贈るという粋な感覚、こういう伝統はしっかりと受け継ぎ後進に伝えていきたいものである。

(広報誌編集委員長 田中 伸哉)

Home Pageのご案内

医学研究科／医学部医学科広報は

<http://www.med.hokudai.ac.jp/ko-ho/index.html>

でご覧いただけます。また、ご意見・ご希望などの受け付けメールアドレスは、

goiken@med.hokudai.ac.jp

となっております。どうぞご利用ください。

北海道大学大学院医学研究科／医学部医学科

発行 北海道大学大学院医学研究科・医学部医学科
広報編集委員会

060-8638 札幌市北区北15条西7丁目

連絡先 医学系事務部総務課庶務担当

電話 011-706-5892

編集委員 田中 伸哉(委員長)、田中 真樹、
玉城 英彦、佐藤 松治